



おとくに
「京都 乙訓 いとをかし」

～清少納言が誘う乙訓～ ルートストーリー

世の中の「もの・こと」を女性らしい視点で記した「枕草子」。

作者の清少納言がよく使う“をかし”という言葉には

かわいい・美しい・おもしろい・・・という意味があります。

現代人がSNSで発する「いいね！」と同義語と言えるかも知れません。

もしも清少納言が令和の乙訓を旅したら、

どんな“をかし”を見つけたでしょうか。

乙訓エリアの“をかし”を訪ねるルートストーリーをご紹介します。

清少納言について	1
はじめに	2
京都西山・乙訓探訪「竹の里めぐり」コース紹介	3
「竹の里めぐり」旅のはじまり	4
物集女車塚古墳	5
竹の径	6
桓武天皇皇后陵	7
向日神社	8
乙訓寺	9
光明寺	10
子守勝手神社	11
寂照院	12
柳谷観音楊谷寺	13
小倉神社	14
アサヒビール大山崎山荘美術館	15
宝積寺	16
大原野神社	17
十輪寺	18
善峯寺	19
京都西山・乙訓探訪「幻の宮往来」コース紹介	20
桜の径	21
長岡宮跡	22
五辻常夜灯	23
西国街道	24
一文橋	25
京都西山・乙訓探訪「才媛の道」コース紹介	26
勝龍寺／勝竜寺城公園	27
長岡天満宮	28
京都西山・乙訓探訪「栄華の轍」コース紹介	29
離宮八幡宮	30
川を越えて、「国宝 石清水八幡宮」へ	31
作者紹介	32
参考資料	33

清少納言 (せいしょうなごん)

生没年不詳。

(康保3年頃〈966年頃〉～万寿2年頃〈1025年頃〉という説もある)

本名：清原諾子(きよはらのなぎこ)

有名な歌人・清原元輔の娘として生まれました。

一条天皇の皇后・中宮定子の私設秘書として活躍。

比類のない博識ぶりと気の強さで宮中でも注目される存在になります。

随筆「枕草子」は代表作の一つ。

藤原道隆(定子の父)の死後、定子の宮中での勢力が弱まり、

そのために帝との第一皇子を生みながらも、

皇子は天皇にはなれなかったと言われています。

第二皇女出産の直後に定子は崩御。清少納言も宮を去りました。

その後の彼女の消息は不明。

若き日に陸奥守・橘則光と結婚し一子を設けるも離婚。

その後摂津守・藤原棟世と再婚。

藤原実方とも交際関係があったと言われています。

このストーリーは、実方との恋物語を中心に書き起こしたものです。

※出自、経歴については諸説あります



はじめに・・・

清少納言の恋人・藤原実方が陸奥に左遷され、
かの地で亡くなりました。
保護者の藤原道隆もこの世を去り、
主・中宮定子の宮中での勢力にも陰りが出てきました。

そんなある日、清少納言は中宮定子から、
まだ何も書かれていない草子(ノート)を見せてもらいました。
「何を書くべきだと思うか」と尋ねられた清少納言は
「枕のことばを」と答えました。
「枕草子」の誕生です。

枕のことば——

枕とは、動かしてはならない大事なもののことをいいます。
つまり彼女が書きたかったのは、
恋人・実方と、尊敬する主・中宮定子との思い出。
ふとした言葉に、彼女の思いが見え隠れします。

千年のときを超えて、清少納言が乙訓を旅したら、
こんなことを思い描いたのではないか・・・
「令和の清少納言」気分で乙訓を体験していただければ幸いです。

「をかし」 ポイント

歴史、特に今のように情報伝達が正確でなかった時代の史実は不確かなことが多いです。
たとえば「枕草子」の章段についても、数え方は研究者によってまちまちで、どれが正解と決められているわけではありません。このストーリーは、「令和の時代に清少納言が存在したら」という空想の物語を、文献を拠り所にして組み立てたものです。解釈や楽しみ方は人それぞれ、でも、肝心なのは自分がどう感じるかです。
ぜひ、実際に足を運んでいただき、自分なりの新しい乙訓の魅力を見つけてください。

京都西山・乙訓探訪「竹の里めぐり」 —向日市・長岡京市・大山崎町縦断コース—

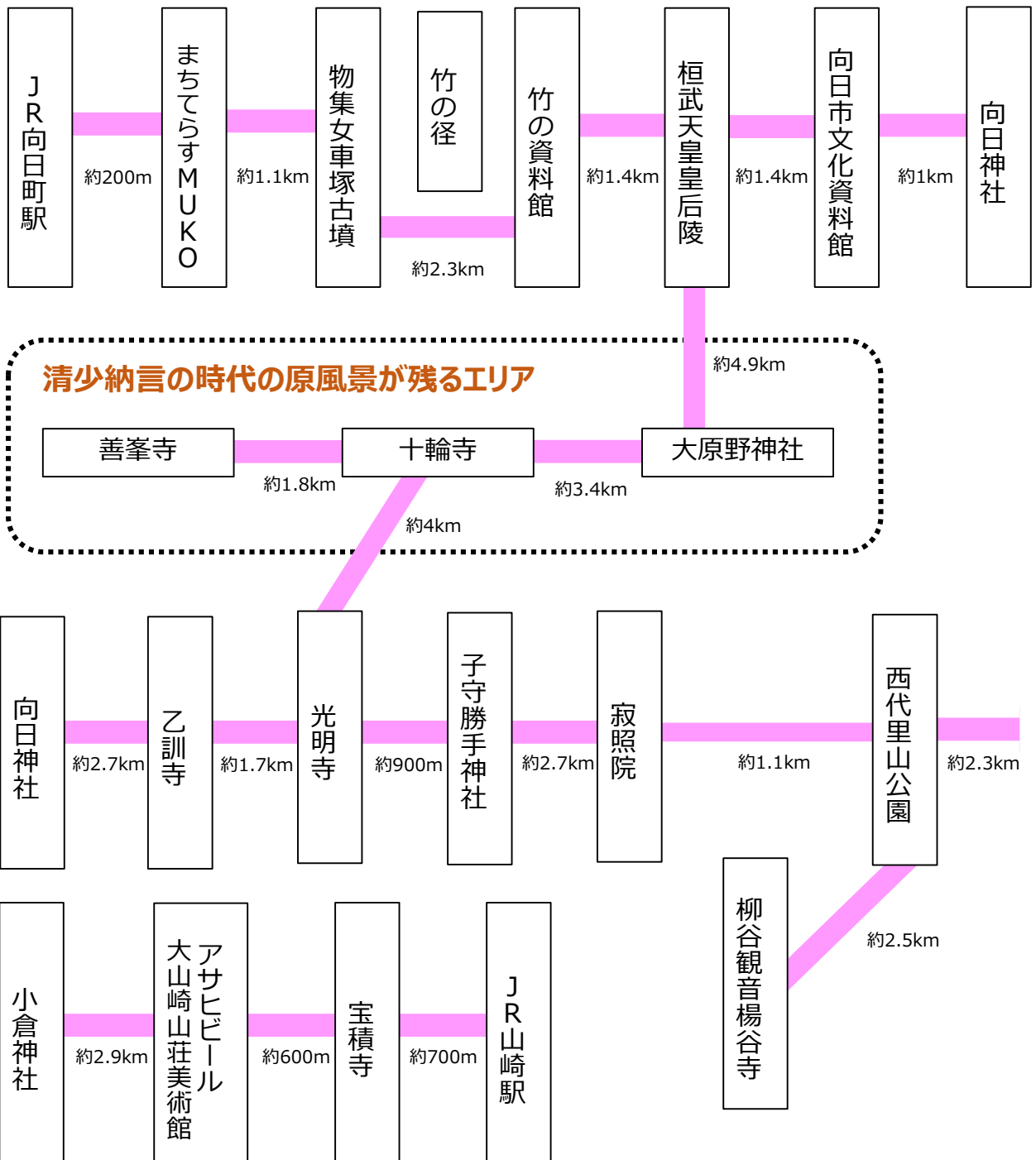
向日市から大山崎町まで、竹の里・乙訓を縦断してお薦めのスポットを巡るコースです。

少し足を延せば、清少納言の時代の原風景をほうふつとさせる

京都市西京区エリアの観光社寺(大原野神社、十輪寺、善峯寺)へ。

さらに、少し厳しい山道を抜けると柳谷観音楊谷寺からの美しい眺望も楽しめます。

コース図を参考にお目当てのスポットだけを選んで訪ねるオリジナルコースを作るのも楽しいですよ。



「竹の里めぐり」

旅のはじまり

どきどきするもの 雀の子を飼うとき。

人を待つ夜は、雨の音や風の音にもどきりとする。 (枕草子 第29段より)

もし、あの人と結ばれていたら……。
そんなことを思ってしまう。

文中の茶色文字部分は、
「枕草子」(現代語訳)からの
引用文です

雀と竹。どちらも「ささ」という。

また、「ささ」は砂鉄のことも示す。

だから昔話には、雀を探して竹藪に入り、
富を手に入れたり、逆に命を落としたり、
そんな話がたくさんある。

いつの頃からか乙訓は竹の里となったと聞く。

富(砂鉄)も命もいらぬが、どきどきする雀——私の雀をさがしてみたい。

「をかし」 ポイント

どうやら竹の里で雀(= 思い出)を探すことが今回の旅のテーマのようですね。
「枕草子」の中に、「岡は船岡。片岡。鞆岡は、笹の生ひたるが、をかしきなり。」
という記述があります。
「鞆岡」(ともおか)とは現在の長岡京市友岡のこと。
この文章からも清少納言が乙訓の笹(竹)を「をかし」と称していたことが分かります。
古典文学に竹の里・乙訓の起源をたどるのも面白いかも知れません。

「物集女車塚古墳」(もずめくるまづかこふん)

雀といっても、
そのままの雀では可愛すぎる。
あの人が雀になったのなら、
少し大きく、凛々しく——例えていうならモズかしら。

モズで思い浮かぶのは塚の百舌鳥(もず)。
かつて仁徳帝が行幸なされた折、飛び出してきた鹿を射たところ、
耳から百舌鳥が出てきたという伝説がある。
その百舌鳥地域で力を持っていた一族である物集女氏が
朝廷から授かった土地が今の物集女だとか。

歳月は古墳となって今に残されている。
「物集女車塚古墳」、
天皇の棺を運んだ車を納めたことが
「車塚」と呼ばれる由来と伝えられる。

「をかし」 ポイント

乙訓には3世紀後半から7世紀後半の古墳時代におよそ400基の古墳が造られたと言われています。古代のロマンを訪ねる古墳めぐりもおすすめです。
長岡京市にある恵解山古墳(いげのやまこふん)や向日市の元稻荷古墳はいつでも見学ができます。物集女車塚古墳(もずめくるまづかこふん)も整備されていて、毎年春にだけ横穴式石室が一般公開されます。



「竹の径」(たけのみち)

物集女を抜けて、しばらく行けば竹の径に。

乙訓に来れば、まずはここへ足を向けてみるのがよい。

幻想的な道が、聞こえぬものまで聞かせてくれる。

あなたはモズとなって、私に何を告げに来たのでしょうか。

あなたの残した歌——

『かくとだに、えやはいぶきの、さしも草、さもしらじな、燃ゆる思ひを』

(百人一首 藤原実方)

(せめて、こんなに私がお慕いしているだけでもあなたに言いたいのですが、言えません。

伊吹山のさしも草ではないけれど、それほどまでとはご存知ないでしょう。燃えるこの想いを。)

枕草子の最後に、私が歌を返したこと。気が付いておられますか？

『おもいだに、かからぬ山の、させも草、誰か伊吹の、里は告げしぞ』

(歌枕名寄6256番)

鉄も金も燃やす息吹き。

同じ名を持つ下野(しもつけ)の伊吹山には、「も草」が生えるという。

あなたは、不老長寿の「も草」を探しに行ったのでは、なかったのですか。

いったい——だれが、あなたを陸奥などに……



「をかし」 ポイント

物集女にある「竹の径」は全長約1,800メートルの竹林道。

「美しい日本の歩きたくなるみち500選」(日本ウオーキング協会)にも選定されています。

乙訓エリアには、いたるところに竹林がありますが、喧騒を逃れて竹林浴を楽しんでみてはいかがでしょうか。

もう少し竹のことを学びたい人には、「竹の資料館」をお訪ねください。

「竹の径」の途中辺りにあります。

「桓武天皇皇后陵」(かんむてんのうこうごうりょう)

ちょっと失礼かもしれないけれど……

生きているうちは帝も貴族も、ごく普通の名前なのだけれど、
どうしてこう文字にすると、いかめしものが沢山あるのかしら。

“いちご”は“覆盆子”

“くも”は“蜘蛛”

“くるみ”は“胡桃”

漢字で書くと、なんとなく仰々しい。(枕草子 第154段より)

“桓武天皇皇后陵”

ここに都を建設しようとした帝のお妃のお墓。

そういうほうが、しっくりくるのだけれど。

「をかし」
ポイント



「桓武天皇皇后陵」は、平城京から平安京へと至るまでの10年間、現在の向日市辺りに長岡京を遷都した桓武天皇の皇后・藤原乙牟漏(ふじわらのおとむろ)の墓とされる陵墓です。

長岡京など、向日市の歴史文化については、向日市役所近くの「向日市文化資料館」をお訪ねください。企画展や各種講座も随時開催されています。

「向日神社」(むこうじんじゃ)

木に咲く花は

濃いもうすいも紅梅。

桜は花びらの大きい、葉の色のこいのが細い枝に咲いたの。

藤の花はしだれた房が長く、濃い色のが良い。 (枕草子 第37段より)

向日神社には藤棚があるのだとか。

藤の花に守られる——そんな寓話が今の世の流行りとも聞く。

藤紫(藤原家と高貴さ=実方)の布の端切れ(=思い出)が

本の間にはさまっているのを見つけたり——

過ぎた日の恋しくなつかしいものを、思い出させてくれる。 (枕草子 第30段より)

やれやれ……男というものは。

「をかし」
ポイント



「向日神社」は奈良時代の養老2年(718年)創建と伝えられ、本殿は「三間社流造」という建築様式で国の重要文化財に指定されています。参道には様々な桜が植えられていて「桜まつり」で賑わいますが、近年は境内にある藤が鬼と闘う大ヒットアニメの聖地として密かなブームとなっているようです。

「乙訓寺」(おとくにでら)

桓武天皇が弟を幽閉したといわれるこのお寺。
なぜ兄弟がいがみ合わなければならなかったのか。
もともと仲の良い兄弟だったのに。
桓武天皇の子は幼かったので、
桓武にもしものことがあれば、
皇子が成長するまで身代わりの帝となる——
そんな兄からの懇願に応えた早良親王(さわらしんのう)。
出家して東大寺にいたのに。
約束に忠実で、あえて妻もめとらなかったのに。

近いようで遠いもの

兄弟や親族の仲。

まるで大晦日とお正月みたい。 (枕草子 第166段より)



「をかし」
ポイント

「乙訓」【おとくに】は、不思議な響きの言葉です。語源は、「墮国」【おちくに】だとか、「少国」【おぐに】だとか、諸説ありますが、弟の国＝「弟国」と言う説は兄弟の縁を感じます。桓武天皇の弟・早良親王が幽閉されたとされる「乙訓寺」は真言宗豊山派長谷寺の末寺です。4月下旬には、お寺の境内で約2,000株のボタンが大輪の花を咲かせます。

「光明寺」(こうみょうじ)

ずっと後の話になるのだけれども。

源氏と平家が争った戦の中で

自分の息子と同じくらいの若武者を討ち取ってしまった男がいたそうな。

その男は戦の後、懺悔し、武士を捨てて僧となる。

名を熊谷直実(くまがいなおざね)という。

直実が建てた念仏三昧堂。

それがもととなって光明寺が生まれたのだとか。

人情の深い人こそいちばんだが、男はことにそうあってほしいもの。

善良な人で、才気のある人は男にも女にもめったにいない。 (枕草子 第269段)

でも——いるのだと、この寺は教えてくれているような気がする。

秋には美しい紅葉が目を楽しませてくれる。



「をかし」 ポイント

西山浄土宗総本山で、法然上人が念仏の教えを最初に説いたことから「浄土門根源地」と言われています。

四季折々の風景が楽しめるお寺ですが、晩秋に色づく紅葉参道は見事。

秋の京都を鮮やかに彩る景勝地としては、間違いなく西の横綱です。

「子守勝手神社」(こもりかってじんじゃ)

子孫繁栄の神

子から孫、

孫からその先へと続いてゆく

ゆく先のはるか遠くに思われるもの

これから遠い陸奥国へ旅立とうとして、

京をでて逢坂の関をこえるとき。

生まれたばかりの赤ん坊をそだてはじめるころ。 (枕草子 第107段より)

中宮定子さまの皇子のことを思い出してしまうのは、

良くないわね。

「をかし」 ポイント

「光明寺」から山裾を少し進むと「子守勝手神社」の鳥居が見えてきます。

もともと子守神・勝手神の二つの神を祀ったのだとか。

子守神は五穀豊穰。勝手神は武の神。

両者あいまって子孫繁栄の神となったと言われています。

「寂照院」(じゃくしょういん)

さて、雀を探しにやってきた竹の里。

孟宗竹と言えばタケノコだけど、

それをこの国にもたらしたのは

禅宗の僧・道元という人。

そして、弘法大師のお弟子さんが建てられた寂照院が

「孟宗竹発祥の地」と伝えられている。

歴史の荒波に巻き込まれても

境内に祀られている仏像たちの威光が

戦乱からこの寺を守り抜いたのではなかろうか。



「をかし」 ポイント

「日本孟宗竹発祥之地」の石碑が建つ「寂照院」。

空海の弟子・道雄僧都が創建した海院寺十院の一つですが、

応仁の乱で海印寺は消失し、塔頭の寂照院だけが残されたと言われています。

入り口の仁王門には二体の金剛力士像(阿形、吽形)が堂々と立っています。

本堂には平安時代の妙見菩薩、鎌倉時代の千手観音菩薩、

日本最古と言われる水子地藏尊などが祀られ、

境内奥には、本堂の再建時に発見された古墳の横穴式石室が展示されています。

歴女、仏像ファン必見のお寺です。

「柳谷観音楊谷寺」(やなぎだにかんのんようこじ)

季節が良ければこちらへ向かおうと思う。

自転車に乗れぬ私は、牛車ではあるが……。

この寺は紫陽花を愛でるによいところと聞く。

五月の山歩きの楽しさ

五月の頃山里を歩くのは、とてもいい気分。

よもぎの香りが

牛車のまわる車にふっと舞い上がり、

顔近くをよぎる。 (枕草子 第223段より)



「をかし」 ポイント

「柳谷観音楊谷寺」は京都清水寺の開祖延鎮が創立。

境内には空海の法力による霊水「独鈷水(おこうずい)」があり、

眼病にご利益があることで知られています。

夏は紫陽花、秋は紅葉が彩り、

四季の花々を浮かべた「花手水(はなちょうず)」は超人気スポット！

少々ハードな道のりですが、美しい景観は息を切らして足を運ぶ価値あります。

「小倉神社」(おぐらじんじゃ)

「平安京の鬼門避け」として、
都のこまりごとを引き受けた神社は、
さすがに暗いところにある。
天王山の裾の「小暗い場所」という意味で名付けられたとも。

こまりはてるもの

手ごわい、なかなか追い払えない物の怪(もののけ)を
調伏(ちょうぶく)することをたのまれてしまった修験者。
疑い深い男に思われる女。
夜泣きする赤ん坊の乳母。
あとは——いまを時めく人。 (枕草子 第157段より)

平安京の守り神よ、
願わくは、雀の行く末を見守りたまえ。



「をかし」 ポイント

奈良時代に鎮座されたと伝えられる「小倉神社」は、歴史的なパワースポットです。
桓武天皇が平安遷都した折には大内裏の鬼門除けとして祈願され、
神階最高位「正一位小倉大明神」と号したと言われています。
また、羽柴(豊臣)秀吉が山崎の合戦の際に戦勝祈願をしたという言い伝えもあります。

「アサヒビール大山崎山荘美術館」

アサヒビール初代社長・山本爲三郎という人、
この時代の実業家は、皆、文化に対する好奇心があって、
『上方今と昔』という著書を読んでも、なるほど——と気品を感じる。
時代も風情も異なるが、そういった気概のある男は格好のいいものだと思う。
その彼が支援していた芸術家の作品が様々に展示されている。

描いて実物より映えるもの

松の木

秋の野

山の里

山の路 (枕草子 第117段より)

逆に、絵にするとつまらないもの

なでしこ

しょうぶ

桜 (枕草子 第116段より)

あれ？ そいえばこの美術館には、
モネの「睡蓮」もあったのね。
失礼。



「をかし」 ポイント

「アサヒビール大山崎山荘美術館」は、大阪の実業家・加賀正太郎氏が20年かけて建築・造園した英国風の洋館で、所蔵品はもちろん、季節ごとに表情を変える庭園やテラスからの眺望はまるで一服の絵画のよう。

モネの「睡蓮」などが展示されている地中館や山手館は建築家・安藤忠雄氏の設計です。

「宝積寺」(ほうしゃくじ)

由来は古く、聖武帝の御代、行基の建立した寺だという。

ただ有名なのはそのずっと後。

豊臣秀吉とか申す者が一夜で建てた「一夜の塔」というのがある。

なんでもこの男は、「一夜で」というものが多く、

人が想像も出来ない速さで動いたり、

ものを建てたりするのが得意であったようだ。

大層出世をしたと聞く。

そんな男に嫁ぐのも、女の本望なのかもしれないが……

男というものは

まったくふしぎな、訳の分からないものだ。

美しい妻を捨てて、たいして美しくもない愛人をつくったりする。

たいそうな美人を、死ぬほど思い詰めるのなら人情として分かるのだが、

女の目でみてもよくないと思う女を……どうしていいと思うのかしら。

理解に苦しむ。 (枕草子 第268段より)

秀吉の愛人が美人かどうかは知る由もないが、

「一夜で」疎遠になったのでは……

と想像するのは私だけかしら？



「をかし」 ポイント

「宝積寺」は、聖武天皇が夢で竜神から授けられたという「打出」と「小槌」が祀られていて、「宝寺」(たからでら)とも呼ばれ、商売繁盛のお寺として有名です。境内は文化財の宝庫で、山門内の仁王門像、本堂内の十一面観音菩薩、閻魔堂内の閻魔王坐像などは国の重要文化財に指定されています。

少し足を伸ばして、
清少納言の時代の原風景が残るエリアへ……

「大原野神社」(おおはらのじんじゃ)

桓武天皇のお妃、名前は藤原乙牟漏(ふじわらのおとむろ)。
美しく、やさしくて、礼儀正しい人だったとか。
帝もことのほか、愛しておられたのだろう。

新しい都をと考えた時も、
帝は平城京にあった藤原家の氏神・春日大神をここに勧進なされた。
そして生まれたのが大原野神社。
帝の思いの丈は、それはそれは……
境内の本殿前に狛犬のかわりに置いた神鹿(しんろく)。
手水舎の水守の鹿。
猿沢池を模した鯉沢池。
平城への思いは、妻への思い。
こだわる帝のお気持ちを、お妃はどのように受け止めていたのだろう。

寵愛を受けるのは羨ましいけれど、
女は、どこかもっと、自由である方がいい。
ちょっと都合がよすぎる解釈かしら。



「をかし」
ポイント

平城京から長岡京へ遷都されたとき、桓武天皇のお妃の参拝のために奈良の春日大社より分祀されたのが「大原野神社」の始まりとされます。
本殿前には、狛犬(こまいぬ)ならぬ神鹿が参拝客を出迎えてくれます。

「十輪寺」(じゅうりんじ)

平城天皇と嵯峨天皇、二人の争いによって皇位から離れたのが在原業平。
(ありわらのなりひら)
この人は、本当に自由な恋をしたと聞く。

有名なのは、清和天皇の女御、二条の後との逢瀬。

後は、四十を過ぎた業平を伴って大原野神社へ参詣し、
「今日は神も、我らの昔のことを思い出しているのでしょうか」と歌っている。

業平はその後隠棲して、住んだのがここ十輪寺。

よほど後のことが好きだったのね。

后が大原野神社に参詣する時には塩釜をたき、
紫色の煙を飛ばして思いを後に伝えたのだとか。



人の心は関のよう。

逢坂の関は、いかにも逢う坂の関というふうに聞こえるけど、

誰が言い出したか、「なこそ関」とも言うそう。

なんとなくだけど、分かる気がして、わびしい。(枕草子第111段より)

「逢う」を「なこそ」(=来るな)と言い換えたくなる……

人の思いは、かくも身勝手なもの。

「をかし」 ポイント

平安時代の歌人・在原業平の晩年の住まい跡とされる「十輪寺」。

境内には業平のお墓「宝篋印塔(ほうきょういんとう)」と「塩釜の跡」が残されています。

庭園は、立って見る・座って見る・寝て見る、三つの見方で感じ方が変わる「三方普感の庭(さんぼうふかんのにわ)」と呼ばれ、春には樹齢200年の枝垂れ桜「なりひら桜」が咲き乱れます。

「善峯寺」(よしみねでら)

血のつながりは定かではないが、
私と同じ清原姓の流れをくむ源信という僧がいる。
その弟子源算は因幡の国の人。
比叡山で学んだ後、事情が出来てふたたび俗世にもどった。
でも、愛していた娘を失ってしまう。
その悲しみと、どのように向き合えばよいのか——
随分苦しんだのでしょう。
ふたたび出家したのだとか。



そして建立したのがこのお寺、善峯寺。
境内は四季を通じて花に彩られる。
圧巻は、多宝塔の前を這うようにのびる五葉松。
徳川綱吉という人の母・桂昌院(けいしょういん)がこの寺に植えたとされる。
「遊龍の松」と呼ばれ、改めて見てみたが——長い。
日本一と称されるだけあって、
本当に長い松。

花こそ咲かないけど、楓や桂、五葉の松が私は好き。 (枕草子第40段)

「をかし」 ポイント

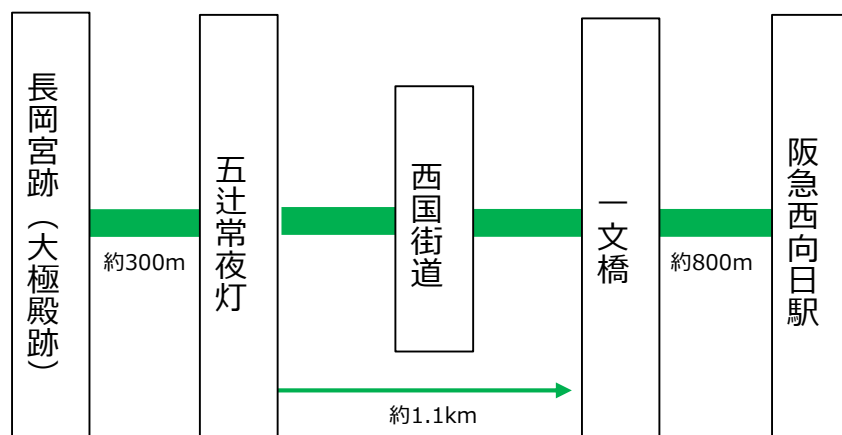
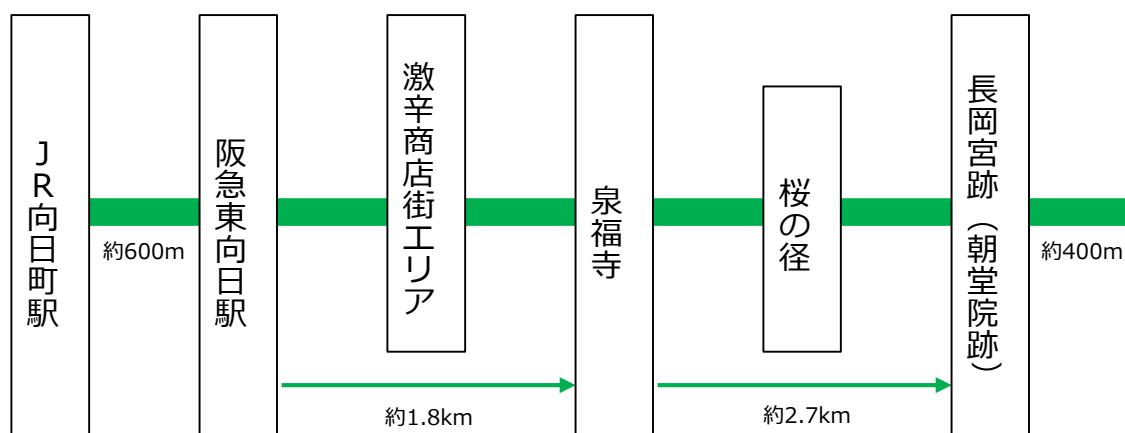
平安時代中期に源算上人によって開かれた「善峯寺」は、山の中腹にあり景色の素晴らしさで知られています。春は桜、秋は紅葉、境内に咲く四季の花々も絶景！
樹齢600年以上の五葉松は全長37メートル、国の天然記念物に指定されています。
龍が遊ぶように見えることから「遊龍の松」と名付けられました。

京都西山・乙訓探訪「幻の宮往来」

みや おうらい

—向日市周遊コース—

平城京から平安京に移るまでの10年間都が置かれた長岡京は、豊かな水に恵まれ交通の要所でもあったこの地、向日神社を中心に造営されました。今も残る史跡と旧街道の面影をたどる向日市エリアの歴史散策コースです。



「桜の径」(さくらのみち)

昭和という時代があったそうなの。

その初期に、今の世の人は特別な思いがあると聞く。

確かに、建物ひとつ見ても、そこに込めた思いを感じる。

その時代からここには閑静な住宅街がある。

ソメイヨシノという桜が植えられているのも美しい。

桜は散るを愛でるとも言うけれど、

ただ散ることを愛でるのは、男の気質ばかりが表に出て、いささか趣に欠ける。

大きいほうがよいもの

家。

弁当の袋。

坊さん。果物。牛。松の木。硯の墨。

男の目。

桜の花びらも大きいほうがよい (枕草子 第233段より)

散るよりもずっといい。



「をかし」
ポイント

阪急西向日駅南東に広がるの閑静な住宅街は昭和初期に開発され、噴水公園を中心に街並みの景観を生かして整備されています。約300本のソメイヨシノが植えられていて、春には「桜の径」として美しい散歩道になります。

「長岡宮跡」(ながおかきゅうあと)

朝堂院跡(ちょうどういんあと)・大極殿跡(たいごくでんあと)

ここへ来たならやはり幻の都を見ておきたくなる。

桓武帝がこの地に都をと思われたのは、潤沢な川筋によるもの。

日ノ本の国々島々。

また周辺の国々との物流。

その拠点となり得る場所であった。

しかし、都は長く続かなかった。

水の害の所為もあったかもしれないけれど……

人の世のことは、所詮、人の心で決まるもの。

さて——長岡京、それとも平安京、どちらが良かったのか。



くらべようもないもの

例えて言うなら夏と冬。どちらがいいとも、悪いとも。

夜と昼。どちらがいいとも、悪いとも。

雨の日と晴れの日。どちらがいいとも、悪いとも。

老いと若さ。どちらがいいとも、悪いとも。

(枕草子第71段より)



「をかし」 ポイント

「長岡京」は延暦3年(784年)桓武天皇によって平城京から遷された都です。桂川、宇治川、木津川、淀川といった大河川が流れる交通至便な乙訓の地が、平安京に移るまでの10年間政治・経済の中心でした。政務や儀式が行われた「朝堂院」や「大極殿」の跡は公園として整備されています。

「五辻常夜灯」(いつつじょうやとう)

藤の花は、灯火の下では映えないわ

藤を含めて、紫色のものは灯の下ではよく見えない。(枕草子 別本より)

逆に

夜にふさわしいものは

おでこの広い女にかかった前髪。

七弦の琴。

それから——

美人ではなくても、雰囲気のある女かしら。(枕草子 別本より)

分かれ道に立つ灯り、

旅する雀たちの明日を照らすかのように。

「をかし」
ポイント



「五辻の常夜灯」は、江戸時代に京都から柳谷観音(楊谷寺)へ行く参拝者のために、柳谷道の起点となる五辻に立てられた石燈籠(いしどうろう)です。道路の拡張に伴って移築されていましたが、平成24年に現在の場所に復元されました。ポケットパークとして整備され、地域の憩いの場になっています。

「西国街道」(さいごくかいどう)

石畳の道がある。

こんな道を私は知らなかった。

それが今の世では「懐かしい」と感じるらしい。

時の流れというのは不思議なものだ。

この道に、かつての屋敷がいくつかある。

格子戸と土蔵に当時の風情が……

風の心地よさ

風は嵐。三月ごろ夕暮れにゆるく吹く雨まじりの風。

明け方、格子や妻戸を押しあけると、

嵐のさっと顔に吹きつけるのが、

なんとも心地よい (枕草子 第197段～199段より)

いい道には、いい風が吹く。



「をかし」 ポイント

「西国街道」は、京都の東寺口を起点として、摂津の西宮に通じる古くからの街道です。乙訓を縦断するように続っていますが、向日町は豊臣秀吉が街道整備で設けた町場で、道沿いの国の登録有形文化財(建造物)に指定されている「中小路家住宅(なかこうじけじゅうたく)」などの大形民家に当時の面影が残されています。

「一文橋」(いちもんばし)

この橋を渡るのに一文払ったから、この名前。

まあ、よくあること。

面白いのは「知らぬ顔の半兵衛」という言葉。

橋守の半兵衛という人、

親しい人が通る時は、見て見ぬふりをしたのだとか。

川は飛鳥川(あすかがわ)。

「世の中は何か常なる飛鳥川 昨日の淵ぞ今日は瀬になる」というように
淵も瀬も定めないこの浮き世。 (枕草子 第62段より)

昨日から今日へ、そして明日へ、

世の中は川のごとく、はかなく流れていく。

半兵衛は見ぬふりをしてくれるだろうか。

「をかし」
ポイント



「一文橋」は西国街道が小畑川を渡る地点に架かる橋です。

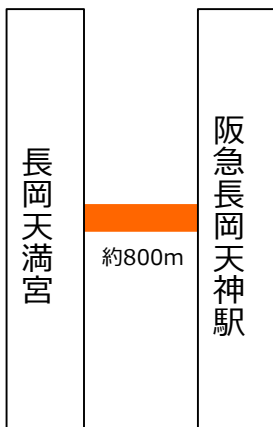
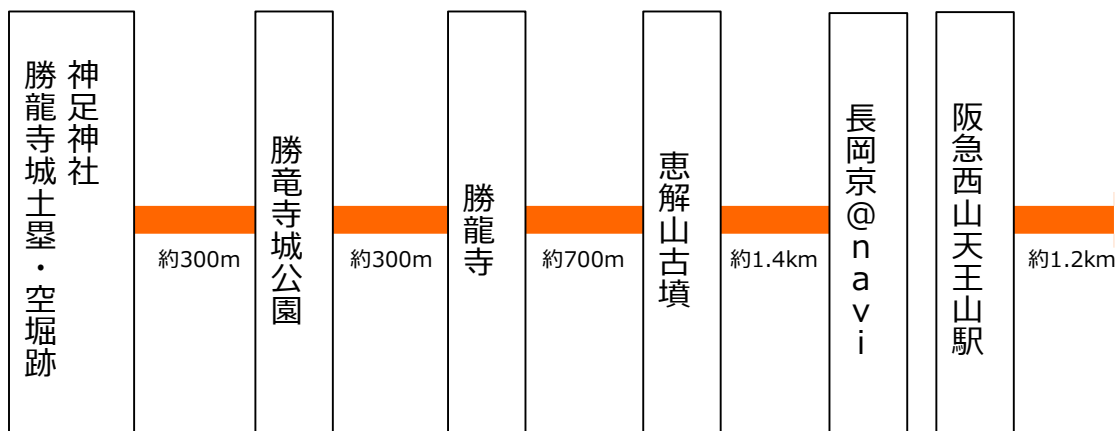
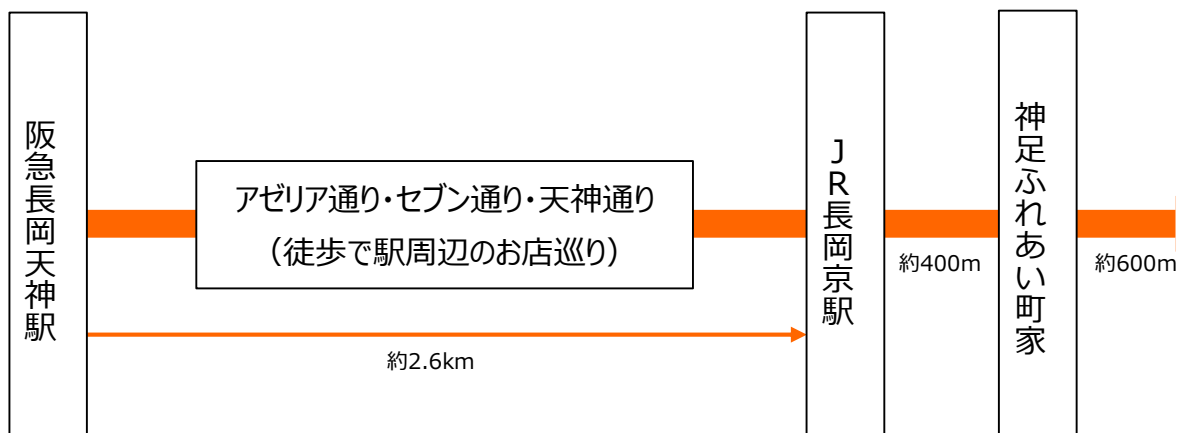
小畑川は大雨が降ると洪水になる、いわゆる“暴れ川”で、この橋は洪水の度に流されていたそうです。橋の架け替え費用に充てるために、通行人から一文ずつ徴収したことが名前の由来とされています。

京都西山・乙訓探訪「才媛の道」

さいえん

—長岡京市周遊コース—

本能寺の変の後、「山崎合戦」の舞台となり、
明智光秀の娘・細川ガラシャが幸せな新婚時代を過ごした地です。
細川ガラシャ、その侍女清原マリア、戦国期の才媛にちなんだ城跡や
長岡京市の史跡をたどる長岡京市エリアの散策コースです。



「勝龍寺／勝竜寺城公園」

(しょうりゅうじ / しょうりゅうじょうこうえん)

帝が雨ごいで龍に勝ったことから勝龍寺、
やがてお寺の名前が周辺の地名となっていく。
そして織田信長の命で京都を守るために
細川藤孝(幽斎)が築いた勝龍寺城。
この城に輿入れしてきたのが細川ガラシャ。
気高く聡明で、民から慕われたすばらしい女性であったと聞く。

女の生き方

先なのぞみもなく、ただ男に縋るような生き方をしている女を見ると、いらいらする。
きちんとした家の娘なら、家にばかりとじこめておかず、
外に出して、社会を見せた方がいい。
宮仕えですれてしまうかもしれないけれど、
才ある女性を妻にして、
ここという時にきちんとしたお役に立つ姿をみれば、
夫もさぞ鼻が高いであろう。 (枕草子 第24段より)

やっぱりかっこいい女は、そうでなくちゃ。



「をかし」 ポイント

「勝龍寺」は大同元年(806年)に弘法大師・空海が建てたお寺で、元々は「青龍寺」という名前でしたが、大干ばつの年に祈祷で雨が降り、龍神に勝ったという意味から改名したと言われています。「勝竜寺城公園」は明智光秀の娘・玉(細川ガラシャ)が新婚時代を過ごした城跡を整備してつくられた公園です。

細川ガラシャの侍女・清原マリア(本名：いと)は奇しくも清少納言と同じ姓で、ガラシャとマリアの間柄に中宮定子と清少納言の慕情が重なります。

「長岡天満宮」(ながおかてんまぐう)

天満宮と言えば菅原道真だけど、
ここは思い入れも一入(ひとしお)の場であつたらしい。
在原業平とともに、詩歌管弦を楽しんだとも言われている。
道真がこよなく愛した梅の花。
ここにも梅林の公園があつて300本以上の梅がある。

それにしても——
菅原道真のことを思うと、やはりこの世は難しい。

悪い癖が少しもなく、姿かたちもよく、心も良く、ふるまいもよく、
世間で生きるのに欠点のない人。
職場ではおたがいに礼をつくし、
すきを見せず、きちんとしている。
なのに、都を離れることになるとは……

やはりこの世はむずかしい。
実方様も——。



「をかし」 ポイント

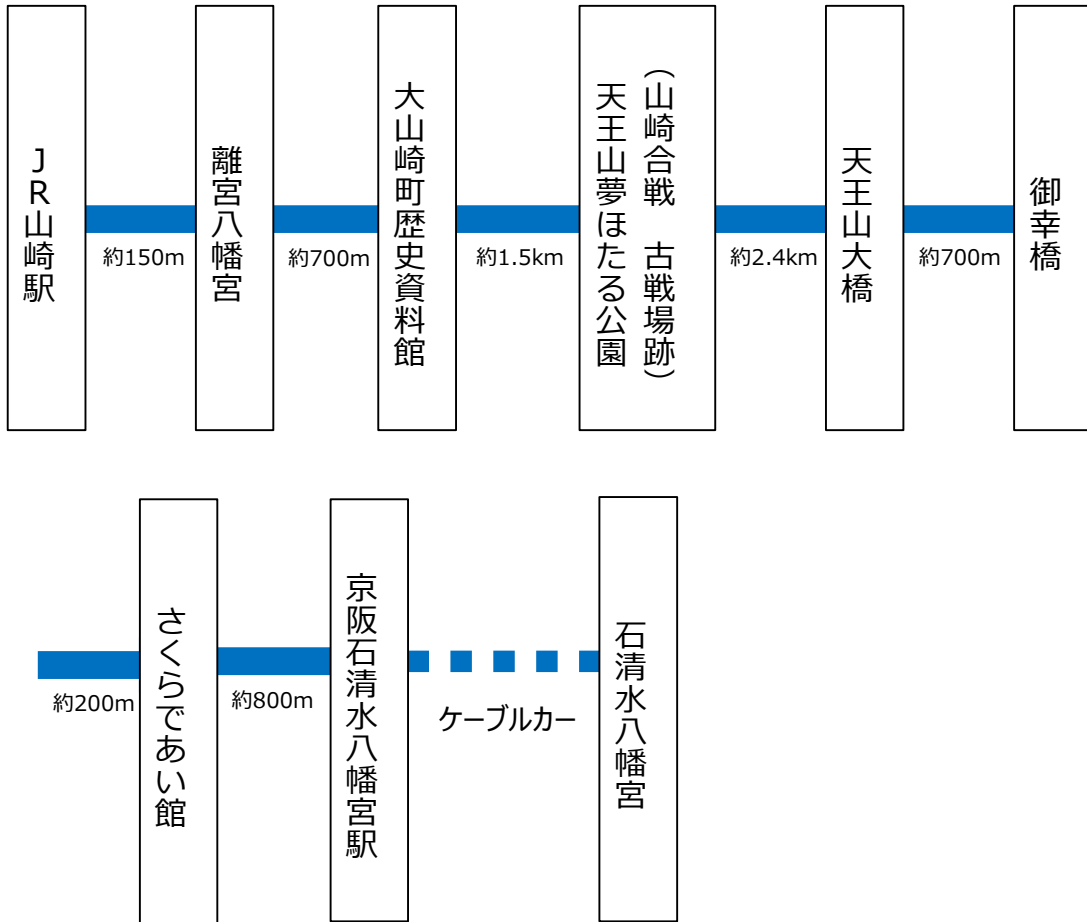
「長岡天満宮」は菅原道真公が大宰府に左遷される時に名残を惜しんだ地として知られています。境内は、梅林以外にも、桜、ハス、アヤメ、カキツバタなど、季節の花が楽しめます。中でも樹齢170年と言われるキリシマツツジの見頃は毎年4月下旬頃。燃えるような真紅に染まったキリシマツツジの回廊は必見です。

京都西山・乙訓探訪「栄華の轍」

わだち

—大山崎町・八幡市周遊コース—

「エゴマ油」発祥地でもある大山崎町は、油の製造と販売の中心「油座」として栄えました。天下分け目の決戦地・天王山の麓から、三川を渡って、国家鎮護の社・石清水八幡宮まで、政治と経済、信仰の栄華を訪ねるコースです。



「離宮八幡宮」(りきゅうはちまんぐう)

今の世では「荳胡麻(えごま)油」は女性に人気があるのだとか。
身体にいい。美容にいい。
アンチエイジングとか言うそうですね。

この辺りでは、昔、荳胡麻の生産が盛んになって、
その後、九州から美濃までの油を独占販売したのだとか。
当時は荳胡麻油を灯火に使うのだけれど……。
それが高価になるということは、
「ありがたきもの」となったということなのでしょう。



ありがたきもの

舅(しゅうと)に褒められる婿。

姑(しゅうとめ)に気に入られる嫁。

主人の悪口を言わない召使。

親しく付き合っ、終わりまで気持ち良く友達でいられる女どうし。

(枕草子第75段より)

神様といっしょにするのは、ちょっと罰当たりかしら。

ちなみに、ここにある腰掛天神の腰掛石に座れば学業成就するそうよ。

「をかし」 ポイント

「離宮八幡宮」は平安時代に九州の宇佐八幡神を勧請(かんじょう)して誕生しました。
嵯峨天皇離宮のあった地だったので、この名前と呼ばれています。
中世になると、この辺りで荳胡麻(えごま)油の生産が盛んになり、油座が組織されて本所
が八幡宮に置かれました。大山崎の油販売高が全国で一番となったこともあるそうです。
現在は、油の神様としても信仰を集めています。

川を越えて、「国宝 石清水八幡宮」へ

(いわしみずはちまングウ)

目の前に広がる淀川。

かつては、もっとたくさんの水を、勢いよく流していたのですよ。

行きかう舟もたくさんあって……

ただ過ぎに過ぐるもの

帆をかけた舟

人の齢

春、夏、秋、冬 (枕草子 第260段より)

浮き世という川の流に身をまかせれば、

喜・怒・哀・楽は、ひとときの泡沫(うたかた)。

ああ、思い出で胸が重くなったとしても、

時はそれを抱いて過ぎ去ってゆく。

私のことも落っことさずに。

そう思ってみる川は、何だか少し――

あたたかい。



「をかし」 ポイント

大山崎町は、淀川水系の桂川・宇治川・木津川の三川が合流する地域にあり、「天下分け目の合戦」で知られる天王山のふもとで、京都の西の玄関口として栄えました。川を越えると石清水八幡宮が鎮座する八幡市です。

河川敷に建つ「さくらであい館」には、周辺の歴史や自然、文化、観光情報等を紹介するコーナーがあり、展望塔からは背割堤(せわりてい)の桜並木が一望できます。

「京都 乙訓 いとをかし」

～清少納言が誘う乙訓～ ルートストーリー

原作者：中野順哉 JUN-YA NAKANO

作家。小説を阿部牧郎、浄瑠璃台本を七世鶴澤寛治の各氏に師事。

2002年より各地の歴史をテーマにした講談を創作し音楽とコラボさせた「音楽絵巻」を上方講談師・旭堂南左衛門とともにプロデュース。上演した作品は100作以上にのぼる。

2011年に日本テレマン協会代表に就任。演奏会を通じたコミュニティー再構築、オランウータンの生息地拡大、大阪の国際発信などを実施。

2013年、日本テレマン協会の創立50周年を記念し、二か月にわたる街角コンサートを実施。そこから得たデータをもとに「老後の楽しみ」と「人と人が顔を合わせることで育むセキュリティカの強化」を目指した町単位の格安コンサート開催してゆく。

2017年8月に日本テレマン協会より独立。

2018年より内閣府参与・原丈人の提唱する公益資本主義を題材に、2050年の日本のあるべき姿を高校生と議論するシンポジウムを立ち上げる。また音楽の分野でも指揮者・梅沢和人（元大阪フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）のステージをプロデュース。

2019年2月に「うたかた一七代目・鶴澤寛治の見た文楽」（関西学院大学出版会）を出版。

また4月には鉄道模型の大家・原信太郎の人生を綴った「あの駅に着いたら…」（データコントロール）を出版。2020年より「パラダイムシフトの群像」という出版シリーズ（関西学院大学出版会）がスタート。第一巻「ンポログマの倒錯」が9月10日にリリースされた。

現在は関西の企業とともに、商品・企業活動に人格を与えるブランドパーソナリティ、ブランドストーリーの構築を行うなど精力的な活動を行っている。

**本文に記載されている「枕草子」の章段については、
日本古典文学大系19『枕草子』（岩波書店）を基にしています。**

《参考資料》

- 岩波新書「現代語訳 枕草子」 大庭みな子 著
- かもがわ出版「京都おとくに歴史を歩く」
監修 井ヶ田良治／都出比呂志／松山宏 編著 乙訓の歴史を学ぶ会
- 「向日市ぐるっと一周歩くガイドマップ」 向日市発行
- 「長岡京はしごツアーBOOK」 長岡京市商工会女性部発行
- 「京都・長岡京おさんぽBOOK」 長岡京市発行
- 「京・大山崎町まちあるきマップ」 大山崎町役場発行
- 「JR京都線向日町・長岡京・山崎エリア沿線見どころガイド」
京都府、JR西日本観光連携協議会発行
- 「西京区おさんぽMAP」 京都市西京区役所発行
- 「ぶらり京乙訓・八幡」 乙訓・八幡広域観光連絡協議会
- 向日市、長岡京市、大山崎町、各紹介スポットの公式ホームページ